

若いお母さんたちへ

“友だち” ってすばらしい

はるにれの会

川上美子



一、保育園へ

(1)はじめに

昨年の七月、長男Tが三才七ヶ月、次男Hが一才一ヶ月の時、私はまた保育園でお手伝いすることに決めた。Hの出産と育児で現場を離れていたが、以前かかわっていた障害を持った子ども達をみてくれる人がいなくなり、私は現場に復帰することにした。四月の時点で、私はTを集団の中に入れた方がいいのかさんざん考えた末、Tの「ママと離れるのが寂しい」「ようち園はいや、おうち園がいい」という発言が決め手となり、一年見送ることにした。ところが事態が変わり、私は二人の子どもを連れて、同じ保育園で私は半日、子ども達は一日すごすことにな

った。

今回は、Tが七月から翌年三月まで、どのように歩んでいったのか、特に友だち関係に焦点を当てて辿ってみたいと思う。

## (2) 先生と泥んこ

Tのファミリー(三、四、五才の縦割のクラス)が決まってから、Tは保育園に行きたくないという日が続いた。私は別のファミリーにすることが多いが、私がいなくなると泣くこともあった。自動車が気に入ってよく乗っていたが、あまり楽しそうでもない。

七月二十八日

担任のS先生に誘われて泥んこや泥水で遊ぶ。先生が一对一ではじめてじっくり泥で遊んで下さった。時おり私のことを思い出し、「ママ ママ」と言うが、それ程気にしてやるようには思えないと後で言われた。この日食事をみんな食べ、空っぽになったお弁当箱を私に見せに来た。

(3) 裸足になって 八月七日

多くの子ども達が園庭で裸になってボディペンティングをしている。何回か先生に誘われるがやらないで、いつもの自動車に乗っている。しかしみんなが遊び終る頃、Tは自動車に水をかけ始める。そして、裸足になって泥水の中に入っている。食後女兒と遊ぶ。みんながワ―と遊んでいる所には入れないが、終り頃になると自分から遊び出す。裸足になり、泥水に触れ、心が解放される。そうすると、友だちとの心のパイプも通じ合う。

(4) 「いないで」 八月十二日

登園すると私はすぐ用事でTと離れた。Tは私を捜したそうだが、そのうち他児と話し始めたとのこと。食事の時間になり、私の用がありTの部屋に入る。席についていたTは私に「いないで」と言う。昼食もみんな食べ、さっそく車に乗っている。私が帰りのお迎えに行く時、「まだ遊ぶ」と言う。

保育園が楽しくなってきたようだ。私に「いないで」と言ったのは、私と一緒にいる時の自分、母親の知っている自分とはちがう、新しい自分を見出ししているから

である。それは、母親から離れて友だちと過ごす自分である。

## 二、はじめての友だち

九月になると、保育園がまた楽しくなってきた。同じファミリーで同年令のK君と気が合うのかよくK君と一緒にいた。そして、私にK君のこと（たとえば歯がどうなってるのか等）をよく尋ねる。また朝登園するとすぐK君の靴箱の中に靴があるかどうか確かめる。

十月の運動会に向けて練習が始まると、他のクラスの子ども達と交わることも多くなり、K君のみならずいろんな子ども達のことを私に尋ねる。Tにとって、友だちと一緒にいること、一緒に生活することが楽しいようだ。また固定遊具で複数の子ども達と遊ぶことができるようになった。たとえばブランコを電車に見立てたり、子ども同志で運転手や車掌になったりし、何日も遊びが続いた。障害を持った子どももブランコが好きで、私もよくT達と遊んだ。Tは電車に関心が強いので、得意に

なって遊んだ。

私が少し新しいことを遊びの中で出すと、子どもはそれを受けて動く。何回も同じようなメンバード遊ぼうち、保育者が先に出したものを自分のものとし、さらに自分達で工夫してより楽しくより豊かな表現をしている。共通のイメージで支えられつつ、新たな展開が子ども達の中からなされていく時、子ども達は実に愉快である。

家では私の言うことを納得して聞けるようになった。弟に対してもやさしく接するようになった。十分に保育園で遊ぶことができ、その体験が心の満足をもたらしているのだろう。

十一月になると、TはK君にびったりくっついて同じようにふるまうようになった。同じものを食べ、同じ様に服を脱ぎ、二人は楽しそうだった。私は友だちがこんなにもすばらしいものなのか、目のあたりに知らされた。同年令ではK君のみならず三、四人の男児と、また縦割りということもあり、一つ年上の男児とも遊ぶよう

になった。

### 三、新しい友だち関係

#### (1)ぶつかり合い

一月五日

○冬休み後をはじめて保育園へ行く。登園したTは、K君に出会い「僕ね、鴨川シーワールドに……」と何回も何回も話しかける。しかし、すでに他児と遊んでいるK君はうるさそうに無視する。TはK君に相手にされず、しょんぼりする。私はそばにいて、かわいそうに思えた。

一月二十二日

○K君もTも円形ドッジボールをしていて、二人とも当てられ、テラスにすわる。TがK君の隣にすわると、「おまえの隣にすわりたくないんだよ」と言われる。

○Tは同じ年令のN君とK君たちといすを使って遊んでいた。いすをめぐるトラブルが生じ、Tは大声で泣く。三才児担当のF先生は、Tの味方になって、Nに言

い聞かせられた。しかし、Nの気持は受け入れられず、その後NはTに、「もう遊んでやんない」と不満をぶつけていた。

一月二十三日 (連絡ノート S先生記)

○朝は一緒に円形ドッジボールをしました。初めはK君の側についていたが、何か二人の中であつたらしく、TがK君の髪の毛を引張ってキーキー言い、二人の関係はここでプツンと切れました。

このように三学期に入ると、友だちから拒否されたり、ぶつかり合いが目立ってきた。二学期のうちは、友だちと関係が切れてしまうようなぶつかり合いはなかった。一緒にいること、遊ぶことの楽しさが生活全体を包んでいた。三学期になり、友だち関係が変化してきた。K君も、ただTとくっついていてはもの足りなくなつたのだろう。

Tの体調が悪いこともあったが、友だちとうまく遊べない時、保育中私の所へ来たりした。また、Tより年上だが、体は小さいS君の後を追っかけまわし、S君とも

あまりいい遊びをしていなかった。

Tは友だちがどんなにすばらしいか体験した後、今度はうまく遊べなくなり、どんな気持ちを抱いたことだらう。しかし、友だちとうまくいく時も、いかない時も、Tの成長にとって貴重な過程だと思う。自分で乗り越えていってほしいと願う日々だった。朝離れる時にやんちゃを言うこともあったが、それでも楽しく保育園に通い続けたことは、幸いだった。週二回モンテソリー教育を受けている。自分にふさわしい課題に集中して取りくみ、やりとげた時の満足感は、Tの心に安定と自信をもたらしたと思う。

## (2) 新しい友だちの模索

今までよく遊んでいた男児とうまく遊べなくなると、Tはちがう友だちとちがう遊びをするようになった。気持のおだやかな女兒達とおうちごっこをしたり、砂で料理を作ったりしてよく遊んだ。お家のイメージというか、安定した暖かい雰囲気に含まれ、Tの心も和んだことだらう。

また一つ年上の男児にまじっていることもあった。広告の紙を細く巻いて剣を作ってもらった。この剣は、三才以上の子どもたちによくはやった。細く固い剣を競って作っていた。Tは自分で作れず、作ってもらう。Tはそれを使って遊ぶというより、それを自分も持つことで、仲間意識を覚えていたと思う。また、広告の紙を三角にぶ厚く折り、鉄砲を作ってもらう。それを大切に家に持ち帰り、大事にそばに置いて遊んでいた。鉄砲もふえていき、三個までになり、古いのは角がすり切れる程になった。三学期も半ばに入ると、遊びのグループも大きくなり、年上の男児の中に、三才児が加わっていた。その中でK君と交わって遊ぶ姿が見受けられた。

さて、この間ファミリーのS先生は、よく見守って下さった。直接遊びの中に入って指導するということはさらなかった。しかし、Tが今どんな状態にあるのか、よく把握して下さった。Tはこの時期に先生に、家の中のこと、家での出来事をよく話していたようだ。そして話し方が、お兄ちゃんぽくなったとノートに書いて

下さった。先生に聞いてもらうことが、やはりTの心の支えになっていたのだと思う。

(3)家では 二月二十三日

咳が出て体調も悪かったのだが、自分の作った積木が、何かの拍子で人が当たってこわれると、Tはギャンギャン泣く。あまりひどく手の下しようがなかった。私は勘忍袋の緒が切れ、Tを外(庭)に出した。Tはまず泣いて、庭から玄関に回り、ちょうどカギが開いていたので裸足で入ってきた。この大泣きは、のどにはよかったのか、すっきりしたようだった。

寝る時、何日も片付けなかった線路をあっさりみんな片付ける。自分の着た洋服もきちんとたたんで寝た。

三学期は、持病の喘息の咳が出る日が何日かあった。咳が出ると落ち着かず、気持ちがいらいらする。ついつい甘えやんちゃが出てくる。発作は精神的な影響も大きい。大丈夫だと自分で自信があると、咳が出ていても頑張れる。しかし、心が不安定だと発作は長引いてしまう。Tは以前に比べ精神的にも体力的にも強くなり、発

作は早く納まるようになった。この日は、積木が少しこわされただけで、あまりひどく泣きわめくので、外に出すことになってしまった。

このことは適切だったかどうか、もっとおおらかに接した方がよかったのか、私には自信がない。しかし、叱られ大泣きしたら、のどのつかえが取れ、自分でもどうしようもない思いからふっきれたようだ。この時期、自分が組み立てた積木や線路を人がこわすとひどくいやがった。そして、自分では直さず、必ず私に直させる。線路を組み立て、電車を走らせる遊びは、もうずっと続いている。作り上げられた空間はTの犯されざる世界である。だから、片付けることがいやで、何日も置いたままである。しかしこの日は、自分から片付けた。

Tは朝起きると、Tの寝床から私はだっこして居間に連れてくる。それからお手洗まで一緒に付いていく。これを私がないと一日がスムーズに出発しない。この他にも、日常生活の中で、自分がこうだと決めたことがくつがえされると、ひどくいやがる事柄がいくつがある。

一日のうちで一度も泣かない日はなかったと思う。

しかし一方で体力はつき、体も大きくなった。自分で言い出したことだが、自分の自転車で教会（保育園）へ十五分位かかっても頑張ってこいで行った。

このようにこの時期は、さまざまなこと混然とし、心の揺れ動くことが多かった。

#### (4)新しい友だち関係へ

○長方形の広告紙を折って三角にすることを思いつく。それをたくさん作った。Tはそれをハンドルに見立て、回転させながら園内をひとりで走りまわっている。家でもたくさん作った。作って遊ぶことも楽しいようだが、ひとりで遊びながら、友だちと遊ぶきっかけを捜しているようだ。友だちとうまく遊べると、ずっと持ち続けたそれを手放しても平気になる。

○三月九日

S先生に、T「L君が入れてくれない」とはじめて言いに来る。

○三月十二日（連絡ノートより S先生記）

この頃友だちと口げんかをしています。K君が昼食を食べ終り、「僕一番」と言うと、T「ちがうよ、N君（年長児）だよ」と否定して、二人でしばらく「ちがうよ、ちがうよ」と言い合い、最後にTが「じゃ明日見てもみようぜ」と言っておさまりました。自分をいっばいっばい出しているように思えました。

三月に入ると、少しずつ様子が変わってきた。ひとりでも、友だちと遊べるきっかけをみつけようとしている。また、友だちの中で自分をはっきり出してつき合えるようになった。新しい友だちを模索しながら、自分を見い出して行った。友だちと遊ぶ時、自分を出して自分の遊びが出来るようになった。

三月二十日

○お迎えに行くと、年上の子どもとTはいい表情で遊んでいた。

○家で体重を測ると、やっと15kgに達し、Tは大喜びで、祖母にも話しに行く。身長も測るように言い、測ると99cmになっていた。二週間に0.5cmものびた。

三月下旬になると、友だちとよく遊べるようになった。Tは自分で克服することができ私もうれしかった。体も重たく、大きくなり自分でも成長を感じたことだろう。そしてうまく友だちと遊べた日は、線路がたとえ人にこわされていても、自分からこわして、さっさと新しいものを作り上げる。その変化はめざましいものである。

○三月二十五日（連絡ノート S先生記）

「一年生になったら、一年生になったら……」と大きな声で歌います。昼食後も部屋をかけながら歌っています。ひとつ大きくなる喜びと一年生と結びつけているのかしら。

私も隣の部屋で、Tの大きな歌声を聞いた。屈託なく歌うTは、大きくたくましくなった実感を感じているように思えた。

おわりに

九ヵ月間のTの歩みをふりかえり、私は母親として、

また保育者として教えられた。

子どもは自ら育つ力を持っている。しかし時に心に問題があると、遊びが停滞し、子どもに生き生きさが乏しくなる。心の問題とは、たとえば友だち関係がうまくいかない、またこれだという自分の遊びがみつからない等である。しかし、ひとたびその問題が乗り越えられると、以前よりひとまわり大きな自分へ成長している。私は三才のTが、友だちを通して、大きく成長する過程をみることでできた。また、友だちのすばらしさ、大切さをしみじみと教えられた。